

地方創生×少子化対策検討会

それぞれのライフステージとニーズに合わせた
多様で包括的な支援の基盤づくりを
少子化対策はまったなし
地域社会の存続が可能かどうかの段階に

甲南大学マネジメント創造学部
前田正子

少子化対策は総合的・包括的に実施すべきもの

子育てしにくい社会を子育てが楽しい社会に変える

(何か一つ実施すれば効果があるものではない)

対象層はライフステージごとに幅広い+さらにそれぞれのニーズも多様

一子どもを安心して生み育てられる基盤整備

自らの選択や意思で働き方や生き方、家族の在り方を選べること

狭義の子育て支援だけでなく、仕事づくり・働き方・働く場所・住み方・住む場所・地域のつながりなど、まさに地域づくりが少子化対策

⇒生き生きと働き仕事も家庭生活や子育ても楽しむ

幸せな大人が増え、その姿が見えることが大切

対象層は多様—乳児期から青年期まで

1. 乳幼児期から社会人としての自立を目指す青年層まで
2. 妊娠・出産前後から子育て期の親子

**安心感を保障し、主体的に自分の人生を歩むための
人生前半の福祉や支援が必要**

対応を先送りした結果・・・

3. 就職氷河期以降、安定した職に就けないままの若年・
中年層の出現 30代後半から50代：7040・8050問題
(現役世代が減少する中で貴重な地域の人材である)

現状の課題①

①乳幼児期の親子への支援メニューは多様化した

子育て支援の組み立てはそれぞれの地域に相応しいやり方がある。

それぞれの支援をどこまで深く広く実施するかは、地域によってバラツキもある。

あらためてその役割や意義について支援者・関係者の理解や継続的な改善が必要。

地域での人材発掘や子どもを育む地域の機運づくりも重要

⇒自治体同士の学びあいや担当者の経験値の蓄積も必要

ニーズが見えていない場合も

②都会の親子や様々な福祉ニーズを満たすために

地方から若い保育士や人材をますます東京が吸収・地方創生とは逆の方向へ

⇒仕事のあるところに若者は移動する

地元の親子の子育て支援は誰がするのか？

子育て期の親子のニーズも多様

働く母親の抱える課題もよく知られているが、専業で育児をしている母親は
たまには子どもと離れたい（一時預かり）・子どもの発達が心配
年齢の違う兄弟を連れて遊びに行ける子育て支援拠点が無い
親の介護が始まる前に早く再就職したい（晩婚化によるダブルケアの可能性）
お金が必要だが、ゆっくりとしたペースで働き始めたいが、
それではニーズが低く判定され保育所に入れない・幼稚園の預かり保育が足りない
⇒母親が再就職する際の様々な仕事の選択肢が必要・職住近接
⇒マザーズハローワークに行くのも大変
地域でママ向けの仕事探しフェアの開催

子どもはかわいいが子育てにはしんどい時もある
すべての母親に共通しているのは

父親も育児に関わるのが当たり前の社会にしてほしい
父親がもっと子どもに関わってくれたら、子育てが楽しめる
父親が疲れ切っている・諦めしかない・父親の会社が変わってほしい

現状の課題②

①将来の親となる若者層・青年層には十分な支援がなく、安定した仕事に就けなかったり、将来への展望が見えない若者が未婚化の進展の背景要因となっている

⇒今の人手不足で問題が見えにくくなっている

②地域の貴重な人材・支え手として発掘・社会での各自の役割を見つけることを支援するのが重要 **まさに「ひと・まち・しごと」の課題**

⇒若者支援の必要性への理解は進んでいない（支援のレベル差大）

支援者側の人材不足・若者本人の希望や能力に合った多様な仕事

探しや仕事づくり（まともな）とセットに・すぐに全員が正規でバリバリ

働けるわけではない＋低賃金の細切れの仕事では自立に繋がらない

学齡期・小学生から中高生

子どもの貧困対策はもちろんのこと

学童期の子どもたちには学童保育の充実や自由に外で遊べる場所を
ゲームばかりでなく直接的な対人コミュニケーションの経験

小中高生には家庭と学校以外の居場所やたまり場が必要

⇒自分たちの育っている地域の多様な大人と知り合う経験

(コミュニティ支援力・子どもを育む力を地域が取り戻すしかけ)

親子も問題に直面した時にどこに行けばいいのか情報不足

在学中に支援が必要な若者がどこかにつながる必要がある

(義務教育の中学と高校の断絶)

高校を中退してしまうと、どこにいるのか分からなくなる・地域に受け皿を作れないか？

学校と多様な支援機関との連携

大学生・高校生・離学後の青年層に 自立支援を

地方出身の学生たちが、戻った時にどんな仕事があり暮らし方ができるのかという情報が不足・イメージできない(就職活動が早くなり、考える前にインターンシップなどが始まる)・地元の大学に進学していないと状況が分からない

離学後の若者で問題に直面した時に支援機関（機関により支援対象層が異なっており、どこに行けばいいのか分かりにくい）につながるのはごく一部

若者が抱える様々な問題が深刻化・長期化しない間に相談することが重要だが年齢が行くほど相談も難しくなる

⇒例えば、ひきこもりのリスクは誰にでもある

何かに躓いても、若者には十分な支援がない

それぞれの若者が目指すものが違うが、最初にどこかに
つながることのできる機会が必要